

# 博 士 学 位 論 文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 6 号

平成 27 年 4 月

神戸松蔭女子学院大学

この冊子は、学位規則（昭和28年文部省令第9号）第8条および神戸松蔭女子学院大学大学院学位規程第11条の規定により、本学において、平成27年3月20日に授与した博士（言語科学）の学位について、その論文の内容の要旨および論文審査結果の要旨を公表するためのものである。

## 博士論文要旨

氏名	新井 文人
学位の種類	博士（言語科学）
学位記番号	博L甲第6号
学位授与年月日	平成27年3月20日
学位授与の条件	神戸松蔭女子学院大学大学院学位規程第3条2項による
学位論文題目	A Formal and Corpus-based Analysis of Grammaticalization of <i>ik</i> 'go' in Japanese (日本語の「行く」の文法化に関する形式的・数量的分析)

## 論文の要旨

本研究の目的は、形式的・数量的分析を用いて、日本語の移動動詞「行く」の文法化プロセスを解明することである。本研究では特に、(1) 文法化の過程に見られる3つの語形——本動詞「行く」、「動詞(連用形)+ゆく」(Vユク)、「動詞+て+ゆく/いく」(Vテユク)——の相互関係を意味・統語の両面から詳細に説明すること、(2) 現代日本語においてVテユクで起こる形態音韻的变化——Vテイク対Vテクという言語変異現象——を引き起こす要因を考察することの2点に重点を置く。(1a-c)は「行く」、Vユク、Vテユクの例であり、後者2つには移動用法とアスペクト用法が存在する。(1b, c)のうち、(i)の文は移動用法の、(ii)の文はアスペクト用法の例である。(2)は、Vテユクで起こる形態音韻的变化の例である。

(1) a. 「行く」

ケンが山道に行く。

b. Vユク

- i. ケンが山道を走りゆく光景
- ii. 花が枯れゆく光景

c. Vテユク

- i. ケンが山道を走ってゆく。
- ii. 花が枯れてゆく。

(2) 遠足へたくさんお菓子を{持っていく/持ってくる}。

本論文では、先に挙げた2つの課題に関し、(1) 現代日本語においてVテユクが広く普及しているのは、文法化の過程で起こったVユクからVテユクへの革新(renewal)に起因すること、(2) VユクからVテユクへの移行を引き起こした要因として意味・統語のレベルでの両語形の構造的な一致が考えられること、そして、(3) Vテユクで起こる形態音韻的变化には言語的要因と非言語的要因の両方が関与する

こと、の3点を主張する。本研究の独自性・新規性は、移動動詞「行く」の文法化プロセスを包括的に説明することを目標に、生成語彙意味論の枠組み (Pustejovsky 1995, 影山 2005, Hidaka 2012) に従った理論的分析と変異理論 (Weinreich, Labov, & Herzog 1968, Labov 1969 *et seq.*, Tagliamonte 2012 他) で用いられるコーパスデータに基づく数量的分析を組み合わせ、文法化という言語変化の一現象に詳細な説明を与えた点である。

日本語の移動動詞「行く」に関しては、その意味記述に焦点を当てたものや歴史の変遷あるいは文法化の進み具合を考察したもの等、様々な観点からこれまで多くの研究がなされてきた (第2章を参照)。しかし、管見の限り、先述した課題に関する考察はこれまで行われていない。その課題の解決にあたっては、2つの異なる方法論を採用する必要がある。なぜなら、第1の課題——「行く」、Vユク、Vテユクの相互関係——は質的あるいは演繹的に説明されるべき問題であり、一方、第2の課題——Vテユクで起こる形態音韻的变化に関与する要因の特定——に取り組むには数量的・帰納的アプローチが求められるからである。それゆえ、本研究は理論的分析と数量的分析を組み合わせ「行く」の文法化プロセスの解明を目指す。

理論的分析にあたり、本研究は(3)に示す意味表示を提案し、「行く」、Vユク、Vテユクの意味構造を形式化するとともに、Roberts and Roussou (2003) に従ってこれら3つの語形の統語構造を考察する。

$$(3) \left[ \begin{array}{l} \text{語彙素} \\ \text{ARG} = \left[ \begin{array}{l} \text{統語構造における項} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[ \begin{array}{l} \left[ \begin{array}{l} \text{Truth-conditional Section (TS)} \\ \text{FORMAL: 語の時間的特性,} \\ \text{距離関数 (DIS),} \\ \text{視点関数 (POV)} \end{array} \right] \\ \left[ \begin{array}{l} \text{CONST: 語彙概念構造 (LCS)} \end{array} \right] \\ \left[ \begin{array}{l} \text{Non-truth-conditional Section (NTS)} \\ \text{TELIC: その動詞の持ち得る結果状態} \\ \text{TRIGGER: 成立するための外的要因} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

数量的分析では、Vテユクで起こる形態音韻的变化に影響を与えるであろう言語的・非言語的要因を設定して考察を進める (第3章を参照)。

第4章では第1の課題に関する理論的分析を提示する。本研究は、この課題を次のように説明する。VユクからVテユクへの革新 (renewal) は、これら新旧2つの語形——歴史的にはVユクがより古いとみられる——が意味・統語の両レベルで構造的な一致を見たことにより引き起こされたものである。意味・統語レベルでの

構造的一致は、V テュクがアスペクト用法において再分析 (reanalysis) ([V-te]-yuk > V-[te-yuk]) されたことに因る。再分析の結果、統語的には *te-yuk* 全体が1つの形態素として機能範疇である Deixis Phrase (Nishigauchi 2014) の主要部に基底生成されるようになる。これにより V ュクと V テュクの構造が意味・統語的に一致し、また、時代が下るにつれてテ形動詞が発達していった結果、V テュクが広く普及するようになっていった。その一方で、V ュクは非生産的な語形となり、現代日本語では（一部の環境を除き）ほぼ消滅してしまったのである。

第5章では第2の課題を分析する。本研究では、V テュクの形態音韻的变化に対して統計的に有意な要因を探し出すだけでなく、有意な要因間での影響の大きさの違い (effect magnitude) や要因内での階層関係 (hierarchy of constraints)——例えば、男性と女性であればどちらがより変化を受け入れるか等——も考察する。分析結果から、本研究は同現象には先行動詞の頻度、話者の性別、文脈、話者の出身地、スピーチスタイルが関与し、特にスピーチスタイルが他の要因に比べて大きく影響することを主張する。このように、本研究では理論的・数量的分析の両方を駆使し、日本語の移動動詞「行く」の文法化の全体像を捉える。

第6章では、第4章での議論を補強する目的で、革新におけるV ュクとV テュクの意味・統語レベルでの構造的一致についての議論を深める。ここでは、移動動詞「行く」が格付与と視点に関する2つの統語的素性を持つことを提案し、これらの素性がV ュクとV テュクの移動用法におけるユクの主要部移動とアスペクト用法におけるその抑制を説明する上で重要な役割を担うことを主張する。具体的には、(1) V ュクとV テュクの移動用法において想定されるユクの主要部移動 (V-to-Deix movement) は、2つの統語的素性を別々の位置で照合するために引き起こされること、(2) これらのアスペクト用法ではユクあるいはテュクが視点素性しか持たず、Deix に基底生成されるために主要部移動が抑制されることを説明する。さらに、意味構造においては、格付与と視点に関する2つの統語的素性がそれぞれ別のクオリアと結び付けられることを述べる。具体的には、格付与に関する素性は構成役割 (CONST) と、視点に関する素性は形式役割 (FORMAL) と関係することを主張する。その根拠として、(1) 視点素性の具体的値は、意味構造において、距離関数と視点関数が「行く」の直示性（あるいは方向性）を指定する形式役割によって決定されること、(2) 構成役割は語彙概念構造によってその動詞の統語構造における項が指定される位置であることの2点を挙げる。また、語彙項目における論理的意味と非論理的意味の区別に関する議論 (von Stechow 1995, Roberts & Roussou 2003) を参考に、本研究は、形式役割は「行く」の論理的意味であること、一方、構成役割は非論理的意味であることを主張する。その理由として、形式役割でその具体的値の決まる視点素性は文法化に係わらず一貫して「行く」に残るが、格付与素性は移動を表わす「行く」、V ュク、V テュクにはあるが、文法化の結果、アスペクトを表わす後者2つの語形では消失していると考えられることを挙げる。加えて、統語的証拠を示しつつ、本研究で示す理論的分析が「来る」「くれる」「あげる」とそのテ形動詞「V テクル」「V テクレル」「V テアゲル」の意味・統語構造

を説明することを述べる。

最後に、本研究は次のような理論的展望を持つ。1つは、生成語彙意味論が文法化という言語変化の一現象に現れる複数の語形の相互関係を明らかにする上で有効な理論的枠組みであることを示した点である。もう1つは、理論的分析と数量的分析を組み合わせることは、動詞から補助動詞への変化に代表される文法化のプロセスにおいて何が起きているかを意味と統語の両面から詳細に説明するだけでなく、文法化が進んだ段階で見られる形態音韻的縮約の原因を明らかにすることを可能にする点である。つまり、理論的分析と数量的分析は相互補完的關係にあり、両者を組み合わせることで文法化のような言語変化の研究に新たな視点をもたらすということである。

## 参考文献

- Hidaka, T. (2012). *Word Formation of Japanese V-V Compounds*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.
- 影山太郎 (2005). 「辞書的知識と語用論的知識——語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」. 『レキシコンフォーラム 1』, pp. 66–101. 東京: ひつじ書房.
- Labov, W. (1969). Contraction, deletion, and inherent variability of the English copula. *Language*, **45**(4), 715–762.
- Nishigauchi, T. (2014). Reflexive binding: awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics*, **23**(2), 157–206.
- Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Roberts, I. & Roussou, A. (2003). *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tagliamonte, S. A. (2012). *Variationist Sociolinguistics: Change, Observation, Interpretation*. Malden/Oxford: Wiley-Blackwell.
- von Stechow, K. (1995). The formal semantics of grammaticalization. *NELS25 Proceedings*, **2**, 175–189.
- Weinreich, U., Labov, W., & Herzog, M. I. (1968). Empirical foundations for a theory of language change. In Lehmann, W. P. & Malkiel, Y. (Eds.), *Directions for Historical Linguistics*, pp. 95–195. Austin, TX: University of Texas Press.

## ABSTRACT OF THE DISSERTATION

This study elucidates the grammaticalization process of the Japanese motion verb, *ik* ‘go’, based on a formal and corpus-based analysis, focusing on i) giving an in-depth semantic-syntactic account of the interrelationship among the three forms appearing in the historical process—*yuk* ‘go’ as a full verb, *V-yuk* ‘V-go’ in which the motion verb follows a verb in infinitival form, and *V-te-yuk* ‘V-CON-go’, the form where the motion verb follows a verb through a conjunctive particle *te*—and ii) explaining the morphophonological change which *V-te-yuk* ‘V-CON-go’ experiences in present-day Japanese, resulting in the linguistic variation between *V-te-ik* and *V-te-k*. (1a–c) are the examples of the three forms in which the Japanese motion verb involves, respectively. (2) is an illustration of the morphophonological change occurring in the *-te* conjunctive form under study.

- (1) a. *yuk* (*/ik*) ‘go’ (full verb)  
*Ken-ga yamamiti-o yuk-u.*  
Ken-NOM mountain.road-ACC go-PRES  
‘Ken goes along a mountain road.’
- b. *V-yuk* ‘V-go’ (the infinitival form)
- i. *Ken-ga yamamiti-o hasiri-yuk-u kookee*  
Ken-NOM mountain.road-ACC run-go-PRES scene  
‘The scene of Ken running along a mountain road’
- ii. *Hana-ga kare-yuk-u kookee*  
flower-NOM die-go-PRES scene  
‘The scene of a flower going to die’
- c. *V-te-yuk* (*/V-te-ik*) ‘V-Con-go’ (the *-te* conjunctive form)
- i. *Ken-ga yamamiti-o hasit-te-yuk-u.*  
Ken-NOM mountain.road-ACC run-CON-go-PRES  
‘Ken runs along a mountain road.’
- ii. *Hana-ga kare-te-yuk-u.*  
flower-NOM die-CON-go-PRES  
‘A flower is going to die.’
- (2) *Ensoku-e takusan okasi-o {mot-te-ik-u/mot-te-k-u}.*  
excursion-DAT many snack-ACC have-CON-go-PRES  
‘I am going to bring a lot of snacks on school excursion.’

The theses of this study are i) the predominant use of *V-te-yuk* (or *V-te-ik*) ‘V-CON-go’ in present-day Japanese is the consequence of *renewal*, in which the erstwhile

V-*yuk* ‘V-go’ has been replaced by the *-te* conjunctive form; ii) what underlies this displacement is the semantic-syntactic correspondence between the older and the newer forms appearing in the grammaticalization process; iii) the morphophonological change in the *-te* conjunctive form is constrained by both linguistic and extra-linguistic factors. Central to this study is approaching to the grammaticalization phenomenon from both a formal analysis employing the theory of Generative Lexicon (Pustejovsky 1995, Kageyama 2005, Hidaka 2012) and a corpus-based analysis within the framework of Variationist Sociolinguistics (Weinreich, Labov, & Herzog 1968, Labov 1969 *et seq*, Tagliamonte 2012, among others) so as to provide a comprehensive explanation for the grammaticalization process of the Japanese motion verb in question.

In spite of a great deal of research on the motion verb concerned, from the synchronic descriptive perspective to the historical and the grammaticalizationist perspectives, the issues which this study addresses remain unaccounted for in the literature (Chapter 2). The remaining issues call for two different approaches: namely, a qualitative, deductive method for explaining the interrelationship among the three forms concerned, whereas a quantitative, inductive one for elucidating the morphophonological change in the *-te* conjunctive form. For the former issue, I explore the semantics of these forms, proposing the semantic representation as in (3), as well as their syntactic structures, following Roberts and Roussou’s (2003) formal approach to grammaticalization.

$$(3) \left[ \begin{array}{l} \textit{lexeme} \\ \text{ARG} = \left[ \text{Syntactic arguments} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[ \begin{array}{l} \left[ \begin{array}{l} \textit{Truth-conditional Section (TS)} \\ \text{FORMAL: Temporal feature,} \\ \text{Distance function (DIS),} \\ \text{Point-of-view function (POV)} \end{array} \right] \\ \text{CONST: Lexical conceptual structure (LCS)} \end{array} \right] \\ \left[ \begin{array}{l} \textit{Non-truth-conditional Section (NTS)} \\ \text{TELIC: The resultative state in which the verb entails} \\ \text{TRIGGER: The external factors in bringing it about} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

For the latter issue, following the framework of Variationist Sociolinguistics, the present study examines several linguistic and extralinguistic factors which possibly condition the linguistic variation in question (Chapter 3).

In the formal analysis (Chapter 4), this study argues that the semantic-syntactic correspondence between the older V-*yuk* ‘V-go’ and the newer V-*te-yuk* ‘V-CON-go’ underlies the renewal process. The reanalysis of the latter in its aspectual use ([V-*te*]-*yuk* > V-[*te-yuk*]), where *te-yuk* as a whole base-generates as the head of Deixis Phrase



(Nishigauchi 2014), makes the form syntactically, as well as semantically, equivalent to the infinitival form in the same usage and thus the aspectual meaning was taken on by the *-te* conjunctive form, in addition to the overlap between these two forms in the transitional use. As a result of the renewal and the gradual increase of the newer form ensued, *V-yuk* ‘V-go’ has become less productive and been driven to near-extinction in present-day Japanese.

In the variationist analysis (Chapter 5), not only the statistically significant factors are identified but also their effect magnitude and the hierarchy of constraints, which affects the morphophonological change in the *-te* conjunctive form (*V-te-ik* versus *V-te-k*), are examined. As a result, this study contends that the linguistic variation is conditioned by verb frequency, speaker’s gender, context, speaker’s place of birth, and speech style, and that the last one exerts a larger influence in comparison to others. Thus, with these two different analyses, the present study captures the whole process of the grammaticalization of the Japanese motion verb.

Moreover, this study provides an in-depth account for the semantic-syntactic correspondence underlining the concerning renewal process, proposing the two syntactic features intrinsic to the motion verb in question, the case-assignment feature and the point-of-view feature (Chapter 6). I argue that these features are crucial for explaining the head-movement of the verb in the transitional use and its suppression in the aspectual use of *V-yuk* ‘V-go’ and *V-te-yuk* ‘V-CON-go’. The verb undergoes head-movement from V to Deix in the former case to spell out these features in different syntactic positions, whereas it is suppressed in the latter case because the aspectualized motion verb in the two grammaticalized forms—*te-yuk* for the aspectual *V-te-yuk* ‘V-CON-go’—base-generates as the Deix head from the outset of syntactic derivation in need for only spelling out the point-of-view feature characterizing the deicticity of the expression. Semantically, these two features connect to different qualia: the case-assignment feature to the CONST quale while the point-of-view feature to the FORMAL quale. This is because i) the FORMAL quale is where the deicticity of the verb is specified by **DIS** and **POV** and ii) the CONST quale is where the syntactic arguments of the verb are specified by LCS. Further, given the logical-/non-logical distinction of meaning in a lexical item (Roberts and Roussou (2003) and also von Stechow (1995)), I identify the FORMAL quale as the logical meaning while the CONST quale as the non-logical meaning of the motion verb in question, since the former as well as the point-of-view feature remains constant regardless of grammaticalization while the latter is lost—and the case-assignment feature, too—as a result of the process.

The present formal analysis can also account for other directional expressions such as *ku* ‘come’ and *kure/age* ‘give’ and the *-te* converbalized forms of these verbs, *V-te-ku* ‘V-CON-come’ and *V-tekure/-age* ‘V-CON-give’. This argumentation is based on the fact that these directional expressions behave in the same way as *yuk* ‘go’ and *V-te-yuk* ‘V-CON-go’ do with respect to the tests, which provide syntactic evidence for the reanalysis of the latter form. I argue that the grammaticalization of these expressions,

from the main verb to the *-te* conjunctive form, can be explained semantically as well on par with that of the motion verb under discussion (Chapter 6).

Theoretical implications of this study are i) the framework of Generative Lexicon is versatile in that it provides accounts for the interrelationship among the forms in the process of grammaticalization, and ii) employing a formal and corpus-based analysis offers an in-depth account not only for what underlines the process of a lexical verb changing into an auxiliary from both semantic and syntactic viewpoints, but also for what causes the reductive change which the grammaticalized morpheme experiences along the progress of grammaticalization; in other words, the complementary use of these two approaches can produce fruitful results in exploring the historical phenomenon.

## References

- Hidaka, T. (2012). *Word Formation of Japanese V-V Compounds*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.
- Kageyama, T. (2005). Zisyo-teki tisiki to goyooron-teki tisiki—goi gainen koozoo to kuoria koozoo no yuugoo ni mukete. In *Lexicon Forum* **1**, pp. 66–101. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Labov, W. (1969). Contraction, deletion, and inherent variability of the English copula. *Language*, **45**(4), 715–762.
- Nishigauchi, T. (2014). Reflexive binding: awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics*, **23**(2), 157–206.
- Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Roberts, I., & Roussou, A. (2003). *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tagliamonte, S. A. (2012). *Variationist Sociolinguistics: Change, Observation, Interpretation*. Malden/Oxford: Wiley-Blackwell.
- von Fintel, K. (1995). The formal semantics of grammaticalization. *NELS25 Proceedings*, **2**, 175–189.
- Weinreich, U., Labov, W., & Herzog, M. I. (1968). Empirical foundations for a theory of language change. In Lehmann, W. P., & Malkiel, Y. (Eds.), *Directions for Historical Linguistics*, pp. 95–195. Austin, TX: University of Texas Press.

## 論文審査結果の要旨

本論文は、日本語の移動動詞「行く」の文法化プロセスを、形式的・数量的分析を用いて解明したものである。本研究では、特に、文法化の過程に見られる3つの語形: 本動詞「行く」、「動詞(連用形)+ゆく」(Vユク)、「動詞+て+ゆく/いく」(Vテユク)の相互関係を意味・統語の両面から詳細に説明すること、および、現代日本語においてVテユクで起こる形態音韻的变化(Vテイク対Vテクという言語変異現象)を引き起こす要因を考察することの2点に重点を置いている。

この2つの課題に関し、現代日本語においては、VユクからVテユクへの文法化の過程で革新(renewal)が起こったこと、その移行は、意味・統語のレベルでの構造的な一致が引き起こしたこと、形態音韻的变化には、言語的要因と非言語的要因の両方が関与することを明らかにしている。

本研究は、生成語彙意味論の枠組みに従った理論的分析と変異理論で用いられるコーパスデータに基づく数量的分析を組み合わせ、文法化という言語変化に包括的かつ詳細な説明を与えた点に新規性がある。「行く」、Vユク、Vテユクの相互関係は演繹的に説明されるべき問題であり、一方、Vテユクで起こる形態音韻的变化の要因の特定に帰納的アプローチが求められるため、本研究では、両タイプの分析を組み合わせ「行く」の文法化プロセスを解明することに成功している。

本論文にも残された課題はある。一例をあげれば、数量的分析でとりあげたデータの量が必ずしも十分ではないことであり、歴史的変化に関して、傾向以上の強い主張ができていないと言えない。

しかしながら、理論的分析と数量的分析を組み合わせることによって、両者の相互補完的關係を示すことで、文法化の研究に新たな視点をもたらしており、今後細部をさらに詰めていけば、より完成された理論になると考えられる。

以上より、本論文は本学大学院博士論文として十分に価値のあるものであると判断される。

主査 教授 郡司 隆男  
副査 教授 松田 謙次郎  
副査 教授 Brent de Chene (早稲田大学)